

中国で砂漠化防止に取り組んで 30 年

@シニア自然大学校 2022 年 6 月 3 日

緑の地球ネットワーク副代表 高見 邦雄

1. 「黄土高原で始めるなんてシロウトは勇敢だ」(高名な先駆者の言)

- ・出発時はシロウトばかりの集まりで、中国の農村、植物、国際協力について経験も知識もなかった。始めるのは簡単、継続は困難で、やめるのはもっとたいへん〜そのおかげで継続できた。
- ・その年(1992 年)6 月にリオデジャネイロで地球サミットが計画されていた。温暖化防止では一致しても、責任と負担をめぐって工業先進国と途上国との足並みはそろわず、実効的な対策がとれない。民間の協力で溝を埋められないかと考えた。
- ・山西省大同を選んだのは中国側で、「緑化に熱心。美人の産地として歴史的に有名。いい酒もあります」、当時は共青团(共産党の青年組織)中央の幹部でいまは農業農村部長(大臣)の紹介。
- ・それから 30 年。地元と協力して植えた木は 1909.1 万本、面積は 6081.7ha で、大阪環状線の内側 2 面分、東京山手線のその 96.5%になり、派遣したボランティアは述べ 4 千人近くになる。小さな団体がよく奮闘したと言えるでしょう。私もほぼ 25 年間、毎年 90~120 日を黄土高原の農村で過ごした。
- ・「靠着山呀，没柴烧．十箇年頭，九年早一年涝…」(山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年は早(ひでり)で一年は大水…、地元の民謡「高山高」)。私の実感でもある。

2. マイナスからの出発=ケンカが相互理解を促した

- ・日中戦争のことを一通りは知っていても、大同でなにがあったか知らなかった(知っていたら避けていた)。大同の中心部と各県の県城などは日本軍が制圧したが、靈丘県、渾源県などの山間の村を拠点に中国側が激しく抵抗。長いところでは足かけ 8 年も戦闘がつづいた。
- ・当初考えたのは環境のための緑化だったが、農村の貧困ぶりを目にし、それへの対策にも役立ちたいと考えた。事業実施場所は山間や丘陵の貧しい村になり、歴史問題と向きあうことに。どこの村に行っても「日本軍以来の外国人」。ダ〜ダオ・リ〜ベン!ダ〜ダオ・リ〜ベン!(打倒日本)。ときにはリーベンクイズ(日本鬼子)。
- ・ずっと自分を抑えていたが、そのうち逆に自分が暴発することを恐れるようになり、意識して自分を押し出し、対立もあえて避けないようにした。「高見は変わった!」と言われる。感情をむき出しにして自分の本心をぶつけると、相手も自分を開いてくれる。関係をもつとは、双方が変わることで、自分が変わらなければ相手も変わらない。相互理解のためにそれがよかったと思う。
- ・カウンターパート緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長の例。

3. 環境破壊と貧困の悪循環 問題に直面しつつ現場で考えた

- ・年間降水量は平均 400 mmほどで大阪の 4 分の 1。問題が 2 つあり、1 つは年ごとの変動が大きいことで、多い年は 650 mm、少ない年は 200~250 mm。2 つ目は季節的な偏りが大きいことで、降水量の 3 分の 2 以上が 6 月半ばからの 3 か月に集中し、春の雨はとくに少ない。「春の雨は油より貴い」。
- ・暑い時期の雨は局所集中的な豪雨となり、1 時間 70 mmの雨を何度か体験した。植生が乏しいため、

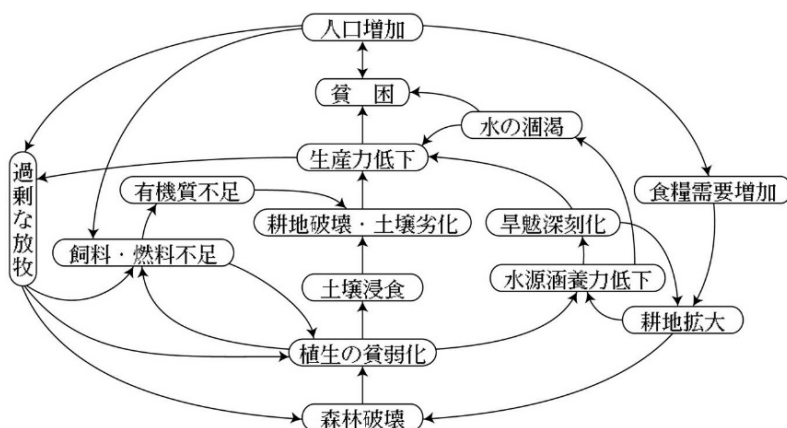
・山や丘陵の上部に防護林をつくり、3種類のマツを植える。植林はワリの悪いしごとで、悪い結果はすぐでるが、いい結果が出るまでには時間がかかる。育ったら育つたで、新たな心配事がでてくる。とくに春先の山火事！春は雨が少なく、風が強く、カラカラに乾燥している。4月5日前後の清明節は先祖の墓参りをする日で、農村ではそのとき火をつかい、山火事の危険が強まる。

・マツが育つと水土流失が治まり、風砂の軽減にも役立つ。マツの落ち葉や枝打ち材で生活燃料がまかなえるようになると、山への圧力が弱まり、自然に森林が再生する。

・1990年代の農村は貧しく、小学校に通えない子も少なくなかった。小学校付属果樹園を建設し、そこからの収入の一部を教育支援にあてる。作業への子どもの参加が、日本からのツアー参加者に好評。継続への力になる。

・管理能力を超えるプロジェクトは必ず失敗する。80ha、6万本のアンズが3年目に全滅。小面積でスタートし、経験と自信をつけてから拡大することにする。

```
graph TD
    A[人口増加] --> B[貧困]
    B --> C[生産力低下]
    C --> D[水の涸渇]
    D --> E[食糧需要増加]
    E --> F[耕地拡大]
    F --> G[旱魃深刻化]
    G --> H[水源涵養力低下]
    H --> I[耕地破壊・土壌劣化]
    I --> J[有機質不足]
    J --> K[飼料・燃料不足]
    K --> L[過剰な放牧]
    L --> M[植生の貧弱化]
    M --> N[森林破壊]
    N --> O[土壌浸食]
    O --> I
    F --> A
    F --> B
    F --> C
    F --> D
    F --> E
    F --> G
    F --> H
    F --> I
    F --> J
    F --> K
    F --> L
    F --> M
    F --> N
    F --> O
```



- ・日本の専門家の積極的な参加。技術改善・人材育成などソフト面の協力を強化。そのための協力拠点を建設する。シロウトが始め、あとで専門家が参加する、これがとてもよかった！
- ・この協力事業のための専門組織を地元に取り上げてもらう。有能なスタッフがそろい、双方の事情を熟知して、バランスのとれた運営にあたる。
- ・地元のベテラン技術者の参加、水不足を補う整地方法。日本からの土壌の通気性改善、菌根菌の活用などの技術を結びつける。活着率の飛躍的向上。

- ・いくつかの協力プロジェクトが成功モデルと評価され、周囲に大規模な国家プロジェクトがやってくる。呼び水の効果。風景が一変し、新しく植える場所を探すのに苦労するようになる。2017年から地続きの東隣り河北省張家口市蔚県に場所を移し、協力事業を継続。
- ・進行中の中国社会の激変は、日本の高度成長期のそれを分野と規模、その速度においてはるかに上回る。メディアなどの報道はそれを捉えきれていない。自分で体感する以外にない。
- ・一党支配でみな同じように考える、というのは日本人が陥りやすい錯覚。中国では「平均」は役に立たず、きわめて多様性のある社会。日本のほうがはるかに均一で平均的なところにまとまっている。上から目線は正しく捉えることをジャマする。
- ・米中対立の激化で、日本はむずかしい道をたどらなければならないだろう。環境面での協力は残された貴重な場所となるかもしれない。

高見邦雄（たかみくにお）プロフィール

1948 年鳥取県の大山のふもとの農家で生まれ育つ。1970 年東京大学中退。中国との民間交流に従事したあと、1992 年緑の地球ネットワークの設立に参加。黄土高原での緑化協力事業を担当し、のちに事務局長、副代表。活動の記録『ぼくらの村にアンズが実った』（日経新聞社、2003 年）は中国版、韓国版も刊行されている。日本と中国とでたくさんの賞を受けている。